



社会・産業と最先端の学問を 幅広くつなぐ『工』の精神のもと 「21世紀工手」の育成を目指す



SUMMARY

1887（明治20）年、欧米諸国に比肩する先進的な国づくりを担う人材の育成を目指して創立された、私学初の工学系高等教育機関「工手学校」をルーツとする工学院大学。以来139年にわたり、工業分野の最先端で活躍する優秀な人材を輩出してきました。現在は4学部15学科と大学院工学研究科を擁し、新宿・八王子両キャンパスに約7,000（大学院含む）名の学生が学んでいます。

今村保忠学長に、「これからの工学院大学の姿をどのように描き、今後どのような取り組みを進めていきたいか」、そのビジョンをうかがいました。また世界規模で急激に変化する時代における『工学』のあり方を語ってもらいました。



いまむらやすただ
今村保忠学長

1987年東京大学理学系研究科相関理化学課程博士課程中退、89年理学博士（東京大学）、2006年工学院大学助教授、08年教授、副学長などを経て24年から現職。

01 工学院大学における 三つの基本方針

学 長就任にあたり、今村保忠学長は取り組みの基本となる三つの方針を表明しました。一つ目は「大学が元気になる 施策の実施」です。

「大学が元気になる」とは、学生が意欲を持って学ぶことができるしくみをつくることです。学生一人ひとりが持つ小さな可能性を大きく広げるためのカリキュラムの充実などを進めていきます。また、学生だけでなく教職員が熱意を持って働くことができる環境づくりにも取り組みます。

二つ目は「研究・教育活動の充実」です。学生は研究活動を通じて、実社会での経験に匹敵する多くの経験を積むことができます。研究活動を充実させることで、対外的なプレゼンスを高めていき、その成果を教育に反映させていくという循環を目指します。

三つ目は「レジリエンスなシステムづくり」です。レジリエンスは「回復力」「復元力」「耐久力」と訳される言葉ですが、今村学長が求めるのは「柔軟で自己修復力があり、持続していくことが可能な大学組織」です。工学院大学が長い歴史を経て積み重ねてきた、研究成果や人のつながりといった貴重な財産を次の世代に受け渡していくために、持続可能な大学組織をつくりあげます。

今村学長は「これら三つの基本方針の実現のためには、学生と教職員、研究と教育などの関係がうまく循環していくことが重要」と強調します。

「学生が意欲的に学ぶための教育環境を充実させることで、学生はよりよい研究者として成長し、卒業研究などで業績をあげることができ

03 これからの時代の 「DX」×「工学」とは

近

学では次のステップとして大学院生向けのディプロマット留学というプログラムも用意し、学生の意欲に応えます。機械理工学科航空理工学専攻のアメリカ訓練校参加も同様です。社会から高いニーズがあり、その道に進みたいと願う学生がいるのであれば、全力でバックアップをしたいと思います。学生一人ひとりの持つ小さな可能性を、大学が大きく広げていく。学生の希望を応援する大学の取り組みは、今後も継続してまいりますね」

年のAI（人工知能）の台頭など、工学分野は日進月歩で技術革新が進み、変化の著しい学問領域というイメージがあります。工学院大学の源流となる工手学校では、工業中心の産業を盛り立てるべく、最先端の技術を習得することが学問の中心でした。その後、工学院大学となつてからはより専門的な技術者のニーズが高まり、学問の中心も最先端の技術研究と工業研究者の育成へと移り変わりました。そして、工業技術がますます高度化・複雑化し、多様化・多文化社会となった現在、学問の融合から新たな知見・価値を創造する21世紀型ものづくりが可能な創造力、発信力および柔軟性に富む人材が求められています。「モノづくりからコトづくりへと変化する時代の要請に応じ、私たちは社会に貢献する『工学』に真摯に向き合ってきました。これから新たな価値を創出する原動力であり続けたいと願っています。そのために必要なのは、これからの時代を見据えた『工学』の再定義です。『工』という文字には実に多様な意味があります。それらの意味の一つひとつを丁寧に見つめ直しながら、本学が取り組むべき新たな『工学』を

02 学生の可能性を広げる ための教育プログラム

工

ます。研究によって対外的な評価が高まることで、多くの優秀な人材が集まり、教育や研究の質がさらに高まっていく。学生と教職員、研究と教育がうまく循環し、螺旋状に前へと向かっていくことが理想です。そうした豊かな研究・教育の環境があれば、次の世代へと持続する大学を実現することも可能になります」

例えば、工学分野以外の分野との教育研究推進の取り組みでは、これまでシンポジウムの開催など学術研究レベルが中心に進んできました。それをさらに教育レベルにも反映させることを目指しています。

工学院大学独自の留学システムであるハイブリッド留学では安定した運用を継続しており、多くの学生が海外での学びを通じて多様な文化や人々と出会い、大きな刺激を受けています。また、エンジニア・パイロットを目指す先進工学部機械理工学科航空理工学専攻においては、アメリカの提携校での海外訓練を着実に実施しています。固定翼をはじめ、26年7月には第7期生が専攻初回の回覧翼における操縦訓練を開始するなど、将来のエンジニア・パイロット育成を強力にバックアップしています。

「ハイブリッド留学では、提携校で英語の授業と本学教員による専門科目の授業を受けます。先進工学部と情報学部はアメリカ・ネバダ州、建築学部と工学部はイギリス・カンタベリーで実施していて、いずれも日本とはまったく異なる生活文化や多様な人々との出会いを通じて、学生たちは大きな刺激を受けて帰国します。こうした海外での滞在経験は、語学学習や異文化理解への関心を高めるとともに、さらなる学びへの意欲を育む貴重な機会となっています。本

04 AI時代の工手の育成

そ

の一方で、今村学長は「工学教育の根幹的な部分で要求される人間としての能力は、時代が変わっても大きく変わることはないでしょう」と話します。例えばAIを使いこなすためには、専門的な知識を学び、スキルを習得するための教育が必要になります。しかし、AIはあくまでツールです。その中核には使えない手である人間がいます。さらにはAIの活用は、人間社会を豊かにするためという大きな目標があります。どれだけ工学技術が高度になっても、こうした人間と工学技術との関係は変わることがありません。

「研究活動の意義は、最先端の知識や専門的なスキルを身につけるだけに留まりません。むしろ研究の過程で培われる思考力や論理的な展開力、忍耐力、創造力、共創力といった能力こそが、社会に出た後も成長を続け、技術の進化に柔軟に対応できる素地となります。また、研究の過程では、必ずしも努力に見合った成果が出るとは限りません。試行錯誤し、迷い、落ち込むこともあります。しかし、そうした経験を通じて、人間としての深みが育まれていきます。本学は、そうした豊かな人間性を備えた工学の担い手を育てる場でありたいと思います」と今村学長は「これからの工学院大学のあり方を語っています。